



友の会だより No.40

(2019年12月20日発行)

自転車文化センター

〒141-0021 東京都品川区上大崎 3-3-1

TEL 03-4334-7953 / FAX 03-4334-7958

Email bccask@jifu.jp

OPEN 9:30~17:00 / 最終入館 16:45

CLOSE 月曜日(祝日の場合は翌平日)・年末年始

令和元年度企画催事

🚲 『2020ハンドメイドバイシクル展』 開催 🚲

■開催日時：令和 2 年 1 月 25 日(土) 9 時 30 分～16 時 50 分

1 月 26 日(日) 9 時 30 分～16 時 30 分

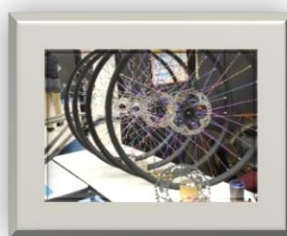
■開催場所：科学技術館 1 階 1～5 催物場

■入 場：無料

■展示内容：今年度の『ハンドメイドバイシクル展』は、科学技術館に会場を戻して開催する運びとなりました。国内外のハンドメイドビルダー・メーカーの自転車並びに、ハンドメイドを中心に制作されている自転車・部品・パーツ等の展示、また、恒例になっております、スペシャルトークショーや、出展頂くビルダーによるトークショー、主催者特別コーナーなど盛だくさんの企画を予定しております。お楽しみに！！

ご来場お待ちしております♪

～「2019 ハンドメイドバイシクル展」の様子～



令和元年度第4回テーマ展示開催中♪

〔働く自転車展〕

◆開催日時：令和元年12月18日(水)～令和2年3月中旬(予定)

◆開催場所：自転車文化センターギャラリー&ライブラリー

◆展示内容：仕事の業種によって、移動・運搬など多目的に利用されている自転車！！現在使用されている「働く自転車」、「歴史的な働く自転車」を実車展示他、職種による自転車を時代背景と併せパネルで紹介。

新着図書のご案内

「今さら言えない小さな秘密」(ジャック・サンペ作/絵 荻野アンナ訳/ファベル)
「サイクルツーリズムの進め方/自転車でつくる豊かな地域」(藤本芳一 著/学芸出版)
「60 歳からはじめる自転車ライフ/もっと元気に！新たな毎日へ踏み出そう」(辰巳出版)
「ロードバイクのトラブル解決マニュアル」(柘出版社)
「サイクリストのための百名峠ガイド/自転車×旅の原点にして頂点！」(八重洲出版)
「弱虫ペダル 64」(渡辺航 著/秋田書店)
「弱虫ペダル SPARE BIKE6」(渡辺航 著/秋田書店)
「本当に速くなるためのロードバイクトレーニング」(八重洲出版)
「クロスバイク購入完全ガイド/2020COSMIC MOOK」(コスミック出版)
「MTB 日和 vol.40」(辰巳出版)
「ロードバイクを自分で組む」(飯倉清 著/柘出版社)
「e バイクの遊び方がまるごとわかる本/新世代の自転車アソビはコレだ！」(八重洲出版)

♪BCC休館日のお知らせ♪

★月曜日休館〔祝・祭日の場合は翌平日〕

1月6日・14日(火)・20日・27日

2月3日・10日・17日・25日(火)

3月2日・9日・16日・23日・30日

◆年末年始につきましては、12/28 から 1/5 までとなっております♪

「BCC友の会」会員募集中♪

自転車に関する書籍など、約 11,500 冊以上を所蔵しています。会員登録をしていただいた方に限り、図書の自由閲覧をすることができます。会員各位におかれましては、ご友人様などご紹介頂けたら幸いです。

「BCC友の会 1 日利用システム」♪

現在、皆様にもっと当センターを活用して頂きたく【1 日ご利用システム】を設置しております。是非、ご利用してみたいかがでしょうか？ご利用の詳細は、BCCHP 又は BCC までお問い合わせください。

～友の会会員証有効期限のお知らせ～

『会員証』更新につきましては、入会日から 2 年間、ご来館のない場合は、無効となりますのでご注意ください。また、再入会の場合は、新たに入会手続きが必要となります。有効期限などご不明の場合は、BCC カウンタースタッフまで、お問い合わせください。

自転車文化センターにご来館の際は、必ず会員証をカウンターまでご提示ください♪



科学技術館入館チケット（招待券）プレゼント！

科学技術館（千代田区北の丸公園）「2F 自転車広場」には、当センター所蔵の歴史的自転車などの常設展示を引き続き行っております。ぜひお立ち寄りください。

♡友の会会員の方に科学技術館入館チケット(招待券)を先着 10 名様（お一人様 2 枚まで）に差し上げます。

自転車文化センター(目黒)にご来館のうえ、インフォメーションカウンターまでお申し出ください。

高齢者の自転車事故と利用時の意識との関係 アンケート調査結果の紹介

BCC学芸員 谷田貝一男

高齢者は加齢とともに体内諸器官機能や運動機能の低下が生じ、そのことが自転車運転技術の低下につながっています。そのため事故防止対策には自転車運転技術の低下という事実の理解度と事故との関係、長年に渡って自転車を利用してきた経験から生じる行動・意識と事故との関係を求める必要があります。

そこで自分の自転車運転技術低下の認識状況と事故経験との関係、並びに交通法規順守意識の強弱と事故経験との関係について、60歳以上の男女770人に対して2013年9月から2017年11月までの期間に実施したアンケート調査から求めたのでその結果を紹介します。

1. 事故経験者の割合

男性の事故状況別経験者の割合はいずれの年代も対自動車事故経験者と対自転車事故経験者が5～10%、対歩行者事故経験者が80歳代の7%を除くと0～1%、転倒事故経験者が10～13%です。これらの結果を使って年代と事故経験率との関係を直線回帰式の傾きとして求めたところ、対歩行者の80歳代を除くといずれの事故状況も自転車事故経験率は年代に関係しないという結果になりました。また日常の利用頻度も対歩行者事故を除くと事故経験の有無に関係しない結果となりました。

表1 男性 事故の相手別 事故経験者の割合

	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳～
対自動車事故経験者	6.9%	7.3%	4.2%	4.7%	6.6%
対自転車事故経験者	6.9%	10.2%	6.3%	7.7%	8.2%
対歩行者事故経験者	0.0%	0.7%	0.8%	1.2%	6.6%
転倒事故経験者	10.3%	13.1%	12.2%	11.8%	13.1%

これに対して女性の事故状況別経験者の割合は高年代になると低下していますが、直線回帰式の傾きとして求めた結果も事故経験率は高年代になると低下する傾向にあるという結果になりました。また利用頻度が高いほど対自動車事故経験者、対自転車事故経験者の割合が多くなる傾向にあるという結果になりました。

表2 女性 事故の相手別 事故経験者の割合

	60～64歳	65～69歳	70～74歳	75～79歳	80歳～
対自動車事故経験者	15.4%	23.7%	0.0%	9.4%	0.0%
対自転車事故経験者	23.1%	18.4%	10.6%	3.1%	14.3%
対歩行者事故経験者	0.0%	0.0%	2.1%	0.0%	0.0%
転倒事故経験者	30.8%	31.6%	17.0%	15.6%	0.0%

2. 交通法規順守意識の強弱と事故経験率との関係

交通法規を守るという意識が強い人の割合は男性女性いずれも事故未経験者が事故経験者の1.2～1.4倍、意識が弱い人の割合は男性女性いずれも事故未経験者が事故経験者の0.5～0.7倍です。

表3 交通法規順守意識の強弱と事故経験の有無との関係

		男性	女性
交通法規順守の意識が強い	事故未経験者	72.0%	77.3%
	事故経験者	58.6%	55.8%
交通法規順守の意識が弱い	事故未経験者	28.0%	22.7%
	事故経験者	41.4%	44.2%

さらに交通法規を守るという意識の弱さと事故経験率との関係について相関係数を使って求めると、男性の対自転車事故と対歩行者事故を除くと、男性も女性も交通法規を守って自転車を利用するという意識が弱いと事故経験率が高くなる結果となりました。

表4 事故の相手別 交通法規順守意識の強弱と事故経験の有無との関係

		男性	女性
対自動車事故経験者	交通法規順守の意識が強い	50.0%	53.8%
	交通法規順守の意識が弱い	50.0%	46.2%
対自転車事故経験者	交通法規順守の意識が強い	71.1%	46.2%
	交通法規順守の意識が弱い	28.9%	53.8%

しかし、男性の対自転車事故経験者と対歩行者事故経験者だけは交通法規を守るという意識が高いと事故経験率も高いという結果となりました。なぜこのような結果になってしまったのでしょうか。

交通法規違反が原因による事故371件のデータによると、対自動車事故173件のうち交通法規違反者が相互にあるのは35件 20%に対して対自転車事故159件のうち交通法規違反者が相互にあるのは66件 42%です。また、対自転車事故における高齢者の交通法規違反内容は一時不停止が41件62%を占めています。このことを考慮すると対自転車事故の経験者は自分が違反したという意識が弱く、結果として事故経験率が高いにも関わらず交通法規を守っているという意識も高い結果になったと考えられます。

また対歩行者事故経験者の中で運転技術低下を認識している理由として「前から来る歩行者や自転車を避けようとした時にふらつくことがある」という状況の割合が最も高く、なるべく一時停止したくないという意識が歩行者の間を無理に通行することになり、これが交通法規違反になることを認識していないことにつながり、事故経験率が高いにも関わらず交通法規を守っているという意識も高い結果になったと考えられますが、今回のアンケート調査では対歩行者事故経験ありの回答者数が少ないため、議論の余地が残ります。

3. 運転技術低下認識の有無と事故経験率との関係

自分の自転車運転技術の低下認識について、「50歳代の頃と変わらないと思う」「50歳代の頃より低下していると思う」という2項目から該当する1項目を選択してもらい、「低下していると思う」と回答した人には低下を認識した状況について次の7項目から該当する項目をすべて選択してもらいました。

- ◎「交差点を曲がるときにふらつくことがある」
- ◎「前から来る歩行者や自転車を避けようとしたときにふらつくことがある」
- ◎「止まるときふらつくことがある」
- ◎「走りだすときにふらつくことがある」
- ◎「ペダルを踏み外したことがある」
- ◎「とっさにブレーキが掛けられない」
- ◎「乗りながらまわりの歩行者や自転車の動きを確認することが難しくなったと思う」

運転技術低下認識を持っていない人の割合が男性女性いずれも対自動車事故経験者は事故未経験者の1.5～1.8倍と高く、男性は対自転車事故経験者、対歩行者事故経験者でも事故未経験者の1.4～1.6倍と高く、自分の運転技術の過信が事故経験率を高くしているといえます。

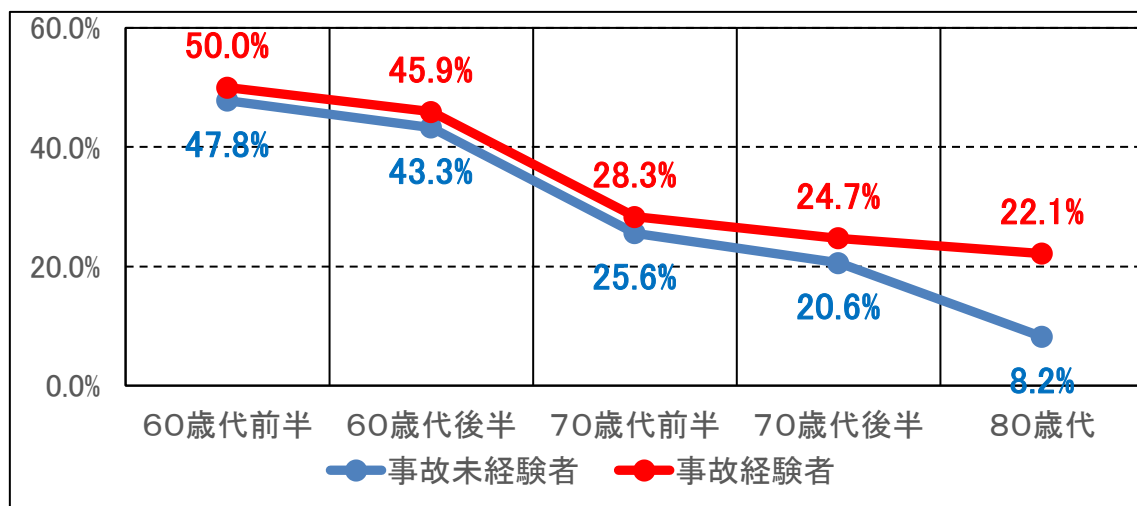
表5 運転技術低下認識の有無と事故経験の有無との関係

		男性	女性
運転技術低下認識を持っている	事故未経験者	72.3%	76.6%
	事故経験者	68.4%	79.2%
運転技術低下認識を持っていない	事故未経験者	27.7%	23.4%
	事故経験者	31.6%	20.8%

表6 事故の相手別 運転技術低下認識の有無と事故経験の有無との関係

		男性	女性
対自動車事故経験者	運転技術低下認識を持っている	58.8%	57.1%
	運転技術低下認識を持っていない	41.2%	42.9%
対自転車事故経験者	運転技術低下認識を持っている	61.2%	82.4%
	運転技術低下認識を持っていない	38.8%	17.6%

さらに運転技術低下認識を持っていない人の割合は男性女性いずれも高年代で低下しますが、男性の事故経験者は事故未経験者と比較して低下が弱く、事故経験者で低下の認識を持っていない人の割合は、事故未経験者で低下の認識を持っていない人の割合に対して70歳代前半1.1倍、70歳代後半1.2倍、80歳代2.7倍になっています。



男性 事故経験の有無と運転技術低下意識をもっていない人の割合との関係

また運転技術低下を認識するのがどのような状況のときかという質問に対する回答として、25%以上の人が事故経験の有無、性別に関係なく「前から来る歩行者や自転車を避けようとしたとき」「走りだすとき」にふらつく」と回答しています。特に歩行者事故、転倒事故経験者は35%以上の人が回答しています。

表7 運転技術低下を認識した状況

	交差点を曲がるときにふらつくことがある	前から来る歩行者や自転車を避けようとしたときにふらつくことがある	止まるときにふらつくことがある	走りだすときにふらつくことがある	ペダルを踏み外したことがある	とっさにブレーキが掛けられない	乗りながらまわりの歩行者や自転車の動きを確認することが難しくなったと思う
運転技術低下認識者	11.6%	38.2%	14.3%	37.8%	22.4%	5.9%	21.5%
事故未経験者	8.3%	26.5%	10.3%	26.3%	13.4%	3.5%	16.4%
交通法規違反事故経験者	4.8%	25.0%	8.9%	22.6%	17.7%	1.6%	8.9%
転倒事故経験者	13.0%	36.1%	12.0%	38.0%	20.4%	10.2%	15.7%

高齢者を対象とした実技調査結果によると、「走りだすとき」にふらつくのはペダルを踏みだすときのペダル位置の高さが低い・踏みだす力が弱いことが、「歩行者や自転車と行き違う際に避けようとしたとき」にふらつくのはハンドル操作力が弱い・ハンドルとサドルの高さの差が大きすぎることでそれぞれの原因であると考えられます。

今回のアンケート結果から、女性は年代が高くなると自転車を利用する割合が低下することもあります。慎重に運転するようになる傾向にあります。これに対して男性は年代が高くなっても自分の自転車運転技術の低下認識が弱い人が女性より多く、そのような人がこれまでの乗車方法で良いと考えがちで結果的に事故を起こしたり事故に巻き込まれたりしている傾向にあります。

本稿は、人類働態学会会報第108号（2018年）に掲載された拙稿「高齢者の自転車事故と利用時の意識」の内容を要約したものです。

自転車文化センターは、競輪の補助を受けて事業を行っています。

